

俺はアラフォーの独身引きこもりニートのオッサンだ。
ある日、コンビニに行く際、交通事故にあい、
大けがを負って救急車で病院に運び込まれた。
直後に、命に関わるから緊急手術になると言われ、
手術室に運び込まれ、全身麻酔をかけられ…。

「俺」「ん…俺、一体どうなって…」

俺は目が覚めたのだが、そこは病室ではなく、事務所のような場所だった。
それにこの格好は、病人の着ている服にしては、妙にエレエレとしている。
髪も妙に長く伸びて、色素が抜けたのか金髪になっているし、
そもそも体つきがおかしくはないか？俺は恐る恐る部屋にある鏡を見た。



【俺】「なんだこの金髪の美少女は…って、これ鏡だから…」
「コレ、俺か!? 俺が美少女!?!」

目を疑った俺は、試しに色々と体を動かした。
鏡に映る美少女は俺と寸違わぬ動きをする。

【俺】「が、可愛い…流石俺!」

【医師】「意識が戻ったようだね。どうだね美少女の体は」

俺が狼狽していると、白衣を着た男性が入ってきた。

「こいつが俺の主治医なのか? とにかくこれがどういう状況なのか、

俺が男に説明を求めると、男はニコニコとした表情で説明を始めた。



俺の元の体は損壊が激しく、このままでは死を免れなかった事と、俺が生き残るには、実験で作られたこの体に、脳を移し替える事しか無かった事を説明された。言われてみれば、病院に運ばれた際、朦朧とした意識で、何か書類にサインした気がする。

【俺】「なるほど、そういう事が…フヒッ」

【医師】「君には新しい戸籍が与えられ、女子○学生として学校に通ってもらう事になる。お金は国から出るので安心したまえ」

【医師は色々な手続きを全部やってくれたらしい。

本当に至れり尽くせりだな。俺ははやる気持ちを抑えて、とりあえず医師の説明を聞いた。



【医師】「そういう事だから、君はこの少女として人生をやり直して欲しい」
【俺】「わかりました。質問いいですか？」

「応体の事もいろいろ聞いてみたが、性別が変わった事以外は特に問題は無いそうだ。」

ただ、男性の脳を移植したからか、性的機能に二部不具合が出ているようだった。

肉体年齢的に、本来なら来ているはずの生理が来ていないようだ。

おそらく、数年もすれば脳が体になじんで生理も来るだろう、との事だ。

つまりそれまでは、生で中出し放題って事か！ますますムラムラしてきた。

俺は股間にジワリと湿り気を帯びているのを感じつつ、次の質問をした。



「俺」「…で、先生はなんでこんな美少女の体なんて作ってたんですか？」

「医師」「そ、それはだね…遺伝子の協力が…」

俺が質問をすると、医師は狼狽えるように、言い訳じみた回答を並べ立て始めた。

俺は、ずっと医師の視線が、

俺の顔や胸元、ヒラヒラさせているスカートから見える太ももに、

執拗に注がれている事と、軽く前かがみになっている事に気づいていた。

今後この体で好き勝手生きていくなら、医者の協力があるに越した事は無い。

「俺」「…それじゃ、二つ実験したい事があるんで、付き合ってもらえますか？」



【医師】「え？ 実験って何をする気だね？」

【俺】「セックスしたらどうなるかって思ってた♡」

俺はそう言っで、さらにスカートをヒラヒラさせ、
医師に太ももを見せつけてやった。

【医師】「せ、セックス!?!」

【俺】「わざわざこんな体作るくらいなんだから、
こういう少女がお好みなんですよね？
じゃあ丁度いいじゃないですか♡
俺も女の体のセックスがどんなのか気になりますし♡」

俺はそう言っで、狼狽える医師を押し倒し、
ペニスを露出させた。



【医師】「ちよ、ちよつと待ちたまえ！ 私ほ……」

【俺】「いやいや、こんな美少女に
こんな服装させて、完全に
先生の趣味ですよねこれ？」

そうやって俺が片足を大きく上げると、
医師の目は俺のオママン」にくぎ付けになった。



【俺】「それに、ずっと太もも見て前かがみになってたの、知ってるんですけど？」

【医師】「ぞ、それはその…」

【俺】「ほらほら、どうですか？」

弁解する医師の顔に俺は足裏を引っ付けてやると、

明らかに呼吸が荒くなり、ペニスがビクンと大きく反応した。こいつ完全に足フェチだ。



【俺】「さーて、このオチンチン、どうしてやろうか♡」

【医師】「うんっ…や、やめっ……」

この体が小柄だからか、妙に巨大に見える
医師のペニスを、ぐりぐりと踏みつける。

その都度ペニスはビクンと反応し、俺の足裏にくすぐったさと、若干の気持ち良さを与えてきた。

